

Juichi WAKISAKA Race Report

2015 AUTOBACS SUPER GT Round 5 - 44TH INTERNATIONAL SUZUKA 1000KM -

◆◆ 攻めの走りを貫き、4位入賞を果たす ◆◆

| No. 19 Weds Sport ADVAN RC F | | |
|------------------------------|------------|-------|
| Drivers | Qualifying | Final |
| 脇阪 寿一 / 関口 雄飛 | 10位 | 4位 |



■大会概要

開催日：2015年8月29日-2015年8月30日

サーキット：鈴鹿サーキット（三重県鈴鹿市、コース全長：5.807km）

レース距離：173周（1004.611km）

入場者数：予選日26,000名、決勝日34,000名、合計60,000名

8月最後の週末、29-30日、三重・鈴鹿サーキットにおいて2015年 SUPER GT 第5戦「第44回インターナショナル鈴鹿1000km」レースが行なわれた。脇阪寿一とパートナーの関口雄飛選手がドライブする No.19 WedsSport ADVAN RC F は、レース後半から俄然ハイペースでの周回を見せて次々とポジションアップに成功。終盤には表彰台の一角を狙って怒濤の追い上げを見せるパフォーマンスの末、4位でチェッカー。チームとして今季最高位の成績を残し、開幕戦からの連続ポイント獲得をも果たしている。

■8月29日(土)

09:20-11:05 公式練習（11:15-11:30 サーキットサファリ）

14:50-15:05 ノックアウト予選（Q1）

15:35-15:47 ノックアウト予選（Q2）

【公式練習】 12番手 / 1'48.774

今シーズンは前半戦で思うようなレースを展開することができず、厳しい状況が続いていた No.19 WedsSport ADVAN RC F。その中で、脇阪自身もまた“さらなる進化”の模索が続いていたが、前回の富士戦を経てその方向性が安定。より前向きな気持ちを持って鈴鹿の戦いに挑むこととなった。

今回の第5戦は、開催地・鈴鹿サーキットにおける伝統の一戦としても知られ、SUPER GT のシリーズ戦になってからは真夏の一戦として、数々の名ドラマを生み出してきた。1000kmという長丁場での戦略、暑さとの戦いなど、数々の試練に打ち勝ってこそ好成績を手にすることができるハードな一戦といえる。

ところが、予選日朝から始まった公式練習では、気温24度、路面温度25度と想定外の涼しさ。事前にテストを経て持ち込まれたタイヤの温度レンジを気にしつつ、まずはセットアップ内容の確認から作業が進められた。富士戦まで、No.19 WedsSport ADVAN RC F はオーバーステアがひどくバランス調整に多くの時間を割いてきたのだが、結果的には改善の方向にあり、それをベースに鈴鹿でのクルマ作りに最終的な調整を加えることになった。

一方でこのセッションでは合計3回の赤旗が出る荒れた展開になり、都度流れが寸断。その中で No.19 WedsSport ADVAN RC F は関口選手がマークした1分48秒774のタイムで12番手につけている。



【ノックアウト予選（Q1）】 10番手 / 1'48.758

午前中の走行セッションでは、例年よりも気温が大きく下がったことで非公式ながら続々とコースレコードを更新する車両が現れた。午後に入った鈴鹿は依然として薄曇りのままで雨も降らず、気温も27度どまり。午後2時50分からのGT500のQ1でも、路面温度が33度と低い数値を示したことから、さらにトップタイムが上がるものと思われた。

No.19 WedsSport ADVAN RC FのQ1アタックは関口選手が担当。残り時間5分を切って、本格的なアタックを始める準備に入っていたが、その矢先、No.6 RC Fがコースアウト。セッションが赤旗中断となる。このハプニングで最初のアタックチャンスを逃すことになったが、のちに残り5分でセッションが再開。気を取り直し、再度アタックに挑んだ関口選手は、1分48秒758のタイムをマーク。朝のセッションでマークした自己ベストタイムを上回ることに成功した。しかしながら、Q2進出へのトップ8には残れず10番手に終わった。

「オーバーステアの状態も良くなったし、一発のアタックラップにも期待していたのですが、残念ながらQ2には進出できませんでした」と悔しさを顔に滲ませる脇阪。「ただ、クルマはここ数戦の中で一番良い雰囲気になっているし、決勝ペースを想定した走りでは良いフィーリングを感じることができています」と明るい材料をあげる。「一方で、決勝は雨絡みになる可能性も高いので、その辺の不安要素がまだ残っています。仮にドライとなれば、安定して良いタイムを刻めるし、周りの車両よりもラップタイムの落ちが少なくそのタイミングも遅いので、それをうまく活かしていければいいなと思います」と、鈴鹿1000kmならではの戦略で好成績を狙っていきたいと目標を語った。



■ 8月30日(日)

11:08-11:28 ウォームアップ走行

12:30- 決勝（173周）

【決勝】 4位 / 10ポイント獲得（シリーズポイント：18ポイント、シリーズランキング：11位）

決勝日の朝も前日同様に灰色の雲が一面に広がった鈴鹿サーキット。不安定な天候、路面状況時こそ、コースでの実走によって現状把握をしたいところではあるが、今大会は朝のフリー走行が行われず、午後0時30分の決勝を控えた午前11時8分から20分間のウォームアップ走行が設けられ、各チームとも決勝に向けての最終確認を行なった。

降ったり止んだりの空模様は、レース直前になって雨のレースへと変貌。気温26度、路面温度28度というまるで秋のようなコンディション下でスタートが切られる。水煙を上げながら周回を重ねる車両の中、No.19 WedsSport ADVAN RC Fのスタートドライバー関口選手は思うようにペースを上げることができない。路面状況とレインタイヤがうまくマッチせず、プッシュすることができない状態となり、しばしがマンの走行を続けることになった。

1回目のピットインは33周終わり。GT500の車両がこの前後に同じくルーティンワークを行なったが、ここで交代した脇阪もレインタイヤを装着してコースへ向う。クルマの状況は関口選手の走行時と同様、ペースアップが難しい状態。その中で脇阪は高い集中力をもって次にパトンを引き継ぐための走り続けた。

レースは63周走行時に、GT300の車両が激しくクラッシュ。コース上に多くパーツが飛び散り、セーフティカーがコースインする。ちょうど2回目のピットインを控えていたNo.19 WedsSport ADVAN RC Fにとっては、そのタイミングを先延ばししなければいけないハプニングにもなったが、「PIT LANE OPEN」のボードが提示されるや否や、ピットイン。すでにスリックタイヤの装着が可能な状況であったため、迷うことなくスリックへと交換、関口選手をコースへと送り込んだ。

タイヤに熱が入り、安定したペースを刻みはじめたNo.19 WedsSport ADVAN RC Fは、次第にハイペースでの走りが可能となる。さらにこのあと、75周目に2度目のセーフティカーが導入されるハプニングが発生。この時点でNo.19 WedsSport ADVAN RC Fは10番手を走行していたが、前方車両との差が縮まったことで、ポジションアップのチャンスが大きく膨らむこととなった。

103周を終えてピットに戻った関口選手からステアリングを委ねられた脇阪。3回目のピットインを前にすでにポジションは6番手へと浮上。また前方では、僅差でのポジション争いが繰り広げられており、激しい混戦模様。もちろん、この状況がまたNo.19 WedsSport ADVAN RC Fへの追い風となったのは言うまでもない。脇阪もハイペースかつ安定した速さで順調に周回を重ね、ときにトップ争いの車両を上回るラップタイムを刻み続けることに成功した。

そして最後のピットインとなる4回目のルーティンワークは132周終わりに実行。上位陣らがピット作業を終えると、No.19 WedsSport ADVAN RC Fは8番手から最後の猛追撃を開始することになった。時間を追うごとに薄暗くなっていく中、安定したドライコンディションを果敢に攻める関口選手。一台、また一台と順調に逆転し、後方からライバルに大きなプレッシャーをかけていく。しばし4位争いを続けたあとは、150周目のシケインでNo.100 NSXをオーバーテイク、4番手から表彰台の一角を目指し、さらにプッシュを始めた。3番手のNo.12 GT-Rとはほぼ20秒弱とかなりの差はあったが、最後の最後まで諦めることなく攻め続け、その差約5秒まで詰めるもあと一歩及ばず。No.19 WedsSport ADVAN RC Fはトップと同一周回となる163周を走破。今季最高位の4位の座を手にし、長く厳しい戦いの幕を下ろしている。



雨から晴れへと落ち着かない天候の中、さらにはタイヤマネジメントにも尽力し、つかんだ4位という成績に対し、脇阪は「チームがミスなく作業をしてくれ、また僕自身も前回から取り組んできた自分自身の改革がうまく形となって良かった」と安堵した様子を見せた。また、「レースを振り返ると、レインタイヤでの走行は厳しいものでしたが、ドライに変われれば速く走れるということはわかっていました。実は昨日のフリー走行からロングランでのタイムが良く、トップチームと変わらないスピード領域で行けることがわかっていました。後半にドライになってからは、上位車両を0.5秒ほど上回るペースで走れたようです。ここ数年、そういう走りができていなかったのが、今回のレースは自分の自信を取り戻せた戦いになりました」とうれしさを口にした。

「色々となりましたが、ベストを尽くしてチーム全員で獲った4位です。関口選手も素晴らしい走りを見せてくれました。3位を獲れずに悔しい、という思いがある一方で、この4位は、レースの神様が“復活するときは優勝だよ”と背中を押してくれているようにも感じました。今季序盤はレースに挑む怖さを感じるが増えていたのですが、前戦富士のレースを終えてこの鈴鹿で戦う楽しみが増え、そしてこのレースが終わってまた次のレースに行くのがより楽しみになっています。みんなが高い意識を持って戦い続けてきたからこそ、手にすることができた4位です。たくさんの応援をいただき、結果を残せたことに改めて感謝します」。

第6戦は宮城県スポーツランドSUGOにて9月19-20日に開催。秋の訪れを感じるサーキットで、新たな目標を見据えた戦いを迎える。

[Photo Gallery]



